

■伝統があるこそ、未来がある。

東北大学大学院修士課程1年 秋 旭

中国の習慣と同じ、日本の方々も始めて顔合わせるとき、挨拶として「ご出身はどこですか？」とよく聞かれている。そのとき、私はいつも誇りを持って大声で「荊州です。」と故郷の名を呼ぶ。『三国志演義』を読んだことのある方々は多分その古い都市の名に印象があると思われる。今の荊州市は昔の荊州の中心地域に位置し、古代のように面積が広がらないが、歴史上諸時代の数少ない都の一つとして、高い誇りや文化伝統をもつ都市である。しかし、このわたしが愛着している都市も時代の推移とともに様々な問題を抱えてくる。その中、わたしが一番心配しているのは伝統、つまり「荊州」という存在がなくなっていく傾向にある。

中国で、荊州市のことを常に「荊州古城」と呼ばれるが、現実には確かに古城の城壁はきちんと残されているけれども、城壁に囲まれる町は、歴史建築が次々取り壊され、古城の雰囲気を使い、どこでも見える普通の都市に変容した。まるで魂を失った殻である。

この問題は荊州市だけではなく、中国のほとんどの歴史をもつ古い町が普遍的に抱えているとは言える。例えば、中国南部に位置する広東省の広州市の場合は、都市建設や開発のために、広州学宮、黄家祠堂、沙面元英国領事館をはじめとする歴史価値の高い建造物が都市開発のため、野蛮に取り壊され、2200年の歴史を持つ広州は新都市に変身した。しかしながら、この変身は良い意味ではあるまい。何故かというと、広州のもともとの文化伝統が消失するからだ。すなわち、今の広州はもはや歴史上の広州ではなく、ただもう一つの広州の名に乘る典型的中国の大都市、しかもどこでも見える大都市である。実は、破壊の後、自治体政府もその問題を認識し始めた。だが、周辺環境あるいは文脈がすでに破壊された場合、取り壊された建造物を立て直しても、その意義がどこにあるのだろうか。だから、特に西安（古の長安）や北京などにとって、本物を壊した後で偽物の骨董品を作るより、もともとの文化遺産をきちんと守る方がずっといいのではないかと考えられる。

眼下の中国の都市は未有の速度で発展している一方、都市の建設や開発と歴史文化伝統をどう両立させるのは重要な課題である。歴史文化財を守り、都市の生きている証を守るのは都市の管理者の最も大切な役目だろう。つまり、都市にとって、当然発展は必要だが、決して文化伝統を犠牲にするわけにはいけない。多くの人はずっと伝統を「旧」として扱い、さらに伝統と発展の矛盾を簡単に「旧」と「新」の不調和として認識する。確かに、伝統は古来から継承してきたものなので、「旧」の属性を持っているのが否認できない。しかし、この「旧」は腐朽の旧ではなく、時間の試練を経て残された文化の神髄ではないかと考えられる。

3月11日の東日本大震災で、多くの町は壊滅的ダメージを受け、町の空間構成とともに文化的記憶を失った。わたしは様々な復興計画の関連セミナーもしくはシンポジウムに参加したことがあったが、やはりいずれも町の元の生活形態に戻ることを求める。これは建築家や都市計画専門家の勝手の要求ではなく、地元の住民たちが先祖代々伝承してきたものを取り戻そうとしているのではないかと考えられる。そのような伝統を大事にする気持ちがあるこそ、日本は京都と奈良など古都を美しく守ってきただろう。

京都の祇園のように、都市機能がきちんと残り、古来の雰囲気も漂い、京都千年の歴史を記録して来た存在には外人のわたしがものすごく感心する。

伝統というものは時間の推移とともに成長するものと考えられる。今のことは何十年何百年を経て歴史になり、伝統の一部になるではないか。その成長は都市の成長、または文化の成長とも言えよう。そして、その成長は連続的であり、中断したら絶対途轍もない損失となる。つまり、伝統があるこそ、未来がある。私はこれからも故郷の発展に注目し、将来文化伝統の保護者になれるように頑張り続けたいと思われる。